

ミステリ読書案内

2022. 8. 9 発行元

第384号 伊藤 剛

<https://mystery-dokuan.com>

最近出た本の中から

今回も売れ筋のベテラン作家中心になった。松岡圭祐の『新進作家・杉浦李奈シリーズ』は別に取り上げようかとも考えたのだが、他特集との関りで、ごく狭いスペースでの紹介になってしまった。

誰のどの作品を取り上げるか

上のリードの部分に書いた通り、松岡圭祐の『杉浦李奈』シリーズの第五巻『信頼できない語り手』は単独の特集でも書けるかとも思ったけれども、いつも10回分くらいをまとめて発行スケジュールに組んでいるので、急には入り込めなかった。2ヶ月ごとの刊行計画が予告されているので次の機会にでも改めて紹介するかもしれない。

誰のどの作品を取り上げるかは常に悩みの種。この『最近出た本』

テーマの号ではシリーズ物の最新刊が基本のつもり。ただ、期待通りに満足いく出来になっているかという点でそうでもない作品があって、当てが外れることもある。なかなか頭で考えていた予定通りには行かないものだ。

今、この原稿を書いているのは7月上旬。各出版社からの「夏特集」が出揃う時期にもなっている。寡作な作家のシリーズものも読みたいなど思っている。思いがけない発見があると良いのだが。新刊書店に行ってみよう！

太田紫織「涙雨の季節に蒐集家は、」

6月に角川文庫光から出たシリーズ3作目。副題は『あなたがくれた約束』。涙もろい大学生の雨宮青音。自ら抱える家庭のことや、幼いころの怖い体験から抜け出せずに旭川で遺品整理士の見習いの仕事に取り組んでいる。第一話の『まっすぐ空へ』は遺品整理で出会った家族の「約束の地」を探す話。第二話の『あなたがくれた約束』が青音の過去やお世話してくれている村雨姉弟の隠されていた部分の核心に迫る山場。ぼんやりしていた記憶が徐々に説明がつく形になり、「そうだったのか」とすべてに納得が行く。丸く納まるどころまでは時間が必要だが、希望に満ちた結末へ。これで完結なのだろうか……？

松岡圭祐「新進作家・杉浦李奈の推論V 信頼できない語り手」

6月に角川文庫から出た本。シリーズ5作目。「本格もの」ミステリの要素を中心に据えているシリーズ。今回は、日本小説家協会の懇親会で、大規模火災が発生して、参加者のほとんどが亡くなるという大事件を取り扱っている。生存者は2名で、計画的な放火であることが判明。主人公で売れないラノベ作家の杉浦李奈はいつも通り編集者などの関係者のしがらみに縛られて事件解決に巻き込まれていってしまう。ベストセラー作家の櫻木沙友理が第三作に続いて登場し、李奈を全面的に頼りにしてくれる。更に『万能鑑定士Q』の莉子も久しぶりに顔を見せてくれて楽しい。本作が、シリーズ中では一番「謎解き」として良くできていると感じる。犯人当て…どうかな？

矢月秀作「神島幻影警視庁公安0課カミカゼ」

6月に双葉文庫から出た本。『警視庁公安0課カミカゼ』シリーズの第四作になる。ハードアクションの内容。瀧川達也が基本の主人公なのだが、他のメンバーも章によっては中心に描かれ、幅広い厚みのある展開になっている。公安の秘密組織に近い0課。潜入捜査を基本とする危険と隣り合わせの部署。今回は、人材派遣会社の裏に隠されているもの、解散した暴力団の残党の行方などを0課メンバーが追っていくうちに背後にあった国家転覆を狙う武装集団に行き着く話。信じている者に裏切られ…の連続で、苦しい場面が最初から最後まで続く。

降田天「偽りの春 神倉駅前交番狩野雷太の推理」

2019年角川書店。そ

して昨年9月に角川文庫に収められた。表題作の『偽りの春』は日本推理作家協会賞短編賞部門の受賞作。随所に工夫の見られる考えられた作品群。でも、私好みではない。副題に『神倉駅前交番狩野雷太の推理』とあるが、狩野が主人公のミステリとは思えない。5つの連作短編から成る。各編の前半は犯罪者側から描いたクライムノベル風。交番の狩野の出番は後半になってから。しかも、のらりくらりと会話を続けながら心理戦で犯罪者を追い詰める形式で、名探偵のスッキリ感とはかなり異質なものを感じる。犯罪そのものも複雑な背景を組み合わせであり、錯綜して語られるので、昔ながらの「倒叙もの」とも違う。まあ、最近よく言われる「ノワール」要素が含まれているというのかも知れない。最後の二編は狩野の過去の事件との結びつきが深く関わっている…。降田天は二人組の合作ペンネームで、少女小説分野での実績もあるようなので、本物の実力を備えているかもしれない。